

虚復が提唱した「足の三陰経は胸腹に脈なし」の説をめぐって

遠藤次郎

演者は、虚復が『芷園臆草』（一六二四）の中で提唱した経絡に関する論説について検討した。

虚復の説は次の二つに要約される。

(イ)素問および靈枢を検討するならば、足の三陰経（太陰、少陰、厥陰経）は、体幹部では体内に伏行するため、体表には経脈およびツボはない。

(ロ)甲乙経（卷之三）、銅人図経、十四経發揮には、胸腹の表面を走行する足の三陰経が記載されているが、この記載は、素問ならびに靈枢の記載と一致しないので誤りである。

演者は虚復の説について検討し、素問ならびに靈枢の諸篇を検討した範囲では(イ)は支持されること、一方、(ロ)は丸山昌朗等の報告（一九五〇）で示される如く誤りであり、胸腹の表面を走行する陰経も認めなければならないことを指摘した。従って、体幹部における足の三陰経には、体内を伏行するものと、胸腹の表面を走行するものとが存在することになり、足の三陰経についての考えは、素問等と甲乙経等とは一致しないことが明らかとなった。そこで、演者は素問等と甲乙経等における足の三陰経についての記載の不一致点を考察し、次の結論を得た。すなわち、靈枢

「五音五味篇」の記載によれば、体内を伏行するものは三陰経の正経と把握することができ、胸腹の表面を走行するものはこの正経が体外に浮いた支別として扱うことが可能である。

この立場に立って虚復の説を次の如く再考した。すなわち、虚復の説を、陰経の正経について論じたものと解釈するならば、(イ)、(ロ)の両説は支持され、虚復の説は本来の陰経の形を論じたものとして重要な意義をもつてくる。

十四経發揮の流れを汲む今日の針灸書では、胸腹の表面を走行するものを足の三陰経の正経とみなす点や、胸腹表面を走行する経脈と体内を伏行する経脈を混同している点などに誤りがみられる。従って、十四経發揮（元代）の誤謬に対する虚復（明代末）の指摘は、一部訂正、補足すべき点はあるものの、今日の針灸書の重大な欠陥をついたものであり、注目に値する。

『エジンバラのバーク事件』

——解剖用死体搬入の犯罪——

関根正雄

バーク事件は、一八二八年、エジンバラ大学の解剖教授 Robert Knox のところへ、殺人死体を提供した常習犯人 William Burke の起した犯罪である。その当時のエジンバラは欧州医学の先頭にたつ隆盛期であった。従って解剖には常に多数の死体が必要であった。正規の死体数をはるかに上回る需要があるので、この burking